

レクリエーション運動の特質に関する基礎的研究の試み ～戦後のレクリエーション書籍のまえがきより～

三橋正幸 [(公財) 秦野市スポーツ振興財団]

はじめに

昭和 24 年 10 月に東京で開催された、第三回全国レクリエーション大会の分科会に、白山源三郎（当時、関東学院大学教授）は、「レクリエーション指導者養成について」の資料を提出し、レクリエーション指導者検定制度の草案を紹介している。しかしその後の、昭和 25 年 3 月に開催された、(財) 日本レクリエーション協会全国理事会の議事録に、「指導検定制度は、原案の研究が不十分のため常務理事会に委任して決定してもらおう」という記録が残されている。レクリエーション指導者検定制度は、昭和 26 年 1 月 1 日付けで制定されているが、検定制度づくりは、数年に渡り検討が行われていたことが理解できる。

レクリエーション指導者資格者の養成は、今日に至るまでに、60 年以上の歴史を刻んできているが、この間、レクリエーション指導者は、レクリエーションの三種の神器とされた G・S・D（ゲーム・ソング・ダンス）指導者として揶揄され批判を受けたこともある。なぜレクリエーションが G・S・D（ゲーム・ソング・ダンス）の活動（アクティビティ）として狭義に捉えられてきたのか、その背景を記述し整理していくことで、わが国のレクリエーション運動の、特質のひとつを明らかにしていくことを試みてみたい。

そこで、レクリエーション指導者検定制度が制定された前後に、公的機関より発行されたレクリエーションを冠する書籍、特にゲームやソング、ダンスを紹介した書籍がどのような背景のもと、編集されたのかを明らかにするため、筆者が代表する書籍に値するであろうと選んだ、一部の書籍の序章（まえがき）を紹介し考察を加えることとする。

昭和 22 年から 24 年にかけて発行されたレクリエーションを冠する代表的な資料・書籍

戦後に発行され、書名に「レクリエーション」を冠した代表的な資料・書籍には次のようなものがある。

- | | | |
|---------|-----------|-----------------------------------|
| 昭和 22 年 | 7 月 10 日 | 『米国のレクリエーションとその指導者』吉阪俊蔵著、日本厚生運動連合 |
| 昭和 23 年 | 7 月 10 日 | 『米国のレクリエーション』平沢和重著、社会教育協会 |
| 昭和 23 年 | 10 月 10 日 | 『レクリエーション教本』PTA 社編集部編、PTA 社 |
| 昭和 24 年 | 1 月 30 日 | 『新しい遊戯：学校とレクリエーション』吉田清著、體育日本社 |
| 昭和 24 年 | 5 月 1 日 | 『こどもとレクリエーション』垣内芳子著、社会教育連合会 |
| 昭和 24 年 | 5 月 10 日 | 『レクリエーション』前川峯雄、教育科学社 |
| 昭和 24 年 | 5 月 20 日 | 『レクリエーション—理論と実際—』白山源三郎著、同文館 |
| 昭和 24 年 | 7 月 30 日 | 『レクリエーション』上田久七*著、三省堂出版 |
| 昭和 24 年 | 8 月 1 日 | 『レクリエーションの手引』神奈川県教育委員会事務局社会教育課 |

※上田久七は昭和 23 年秋に没している。上田の意志を継いだ三隅達郎が原稿をまとめ昭和 24 年に『レクリエーション』は上田の名で発行された。

以下では、PTA 社発行の『レクリエーション教本』及び神奈川県教育委員会社会教育課発行の『レクリエーションの手引』を取り上げ紹介したい。

『レクリエーション教本』（PTA 社編集部）のまえがき

本書は、序（1）、第一篇概説 第一章.レクリエーションの意義（10）、第二章.レクリエーションの指導者の心得るべきこと（12）、第三章.ピクニック（20）、第二篇ゲーム 第一章.ミクサーズ（26）、第二章.一円ゲーム（31）、第三章.二円ゲーム（35）、第四章.ラインゲーム（37）、第五章.ボールその他特別の道具を用いるゲーム（50）、第六章.場所が狭い場合のゲーム（69）、第七章.チャレンジ（85）、附.ドラマチックゲーム（94）、第三篇フォークダンス 第一章.グランドマーチ（100）、第二章.ヴァージニアリール（107）、第三章.スクエアダンス（113）、第四篇音楽 一.グループ合唱（129）、二.モーション（動作付）合唱（131）、三.音楽鑑賞（131）、附録（楽譜、歌詞）（135）で構成され、全 157 ページの教本となっている。（（ ）内はページ数。）

序のページには次のような記載がある。

従来、我々日本人は、何かの目的を以て集会を催した場合、そのプログラムに種々の娯楽番組を入れるという事が大変少なかったように思われます。又、たとえそのような番組があったにしても専門家を招くとか、あるいは隠藝を持っている人達丈が余興をする丈で、その集会に集った人達全部と一緒にゲームをしたり、合唱したりするような事はまれでした。

・・・中略・・・

今後我々日本人も民主的機構に慣れるに従って種々の集会の機会を持つようになるでしょう。その時、今迄のようなやり方をしているはかえって集会の機会を少なくしてしまうような結果となり民主主義に逆行するようになる恐れがあります。そこで不十分ではありますがその集会の際の技巧をお教えしたいと思います。これがこの小冊子の主な目的であります。

教本は編者として PTA 編集部とだけ記載されているため、著者個人名を特定することはできない。しかし、本文の最後（P.133）に、「（本書の内容に関する質疑は、本書の編集に格別の御高配を得ました 大阪軍政部民間教育課内 松本 一 氏宛にお願い致します。）」と印刷されている。また、昭和 23 年 7 月に大阪軍政部から正式に承認を受けて PTA 組織が発足したという記録も残されていることから、GHQ による民主化教育のための一手段として、ゲームやダンス、歌を中心とした集会の技巧としてのレクリエーションの啓発が推し進められ、『レクリエーション教本』が戦後いち早く PTA 社から発行されたものと考えられる。なお、日本 PTA 全国協議会は、昭和 27 年 10 月 14 日に結成されている。

『レクリエーションの手引』（神奈川県教育委員会事務局社会教育課）のまえがき

本書は、文部省（当時）が第一回レクリエーション指導者養成中央講習会を開催する直前に、地方公共団体教育委員会が発行した手引書である。目次は、はじめの言葉（2）、一.レクリエーションとは（4）、二.指導者及参加者が心得ておきたいこと（6）、三.レクリエーションのとりあげかた（10）、四.歌について（12）、五.ゲームについて（28）、六.ダンスについて（37）、七.レクリエーション・パーティーの計画と運営（57）、あとがき（60）で構成され、全 60 ページの手引書となっている。（（ ）内はページ数。）

「はじめのことば」全文は次のとおりである。

終戦後の混沌の時代もやゝ落付きを見せたかと思っっているまに、新たなる経済的不安、社会的不安が現出つゝあることは見逃すことが出来ません。一体こんな潤いのない生活がいつまで続くのでしょうか。一方映画を見ても、また町に散見する進駐軍の人をみても「外国人は本當に生活をエンジョイしている」と感ぜられます。

こうしたことは現實の生活があまりに経済的に苦しいことを示していると同時に、私達が生活を楽しむ方法をあまり知らないことを示しているのだと思います。色々経済的、歴史的な原因はあるにしてもたしかに現實の私達は生活を楽しく暮らすように工夫し、實行してゆき、そしてそうすることが本當に社会を明るい方向に建設出来るのだと思います。

生活は楽しく過すべきものです。楽しく過すといつても勿論所謂享樂的にすごすことを意味しません。健全に明るく、希望と喜びをもつて生活することです。そうした意味で、楽しんで生活してこそ個人の生活は充實し、身心共に活潑となり仕事の能率も上り、社会は好ましく推進されてゆくのです。

それ故、その人へなりに経済的に苦しい生活の中にあつて何とかして生活に潤いと喜びをもつようにし、手をとりあい協力しあつて健全な明朗な社会をつくろうと努力することが現在の日本にとつて最も重要なことだと思ひます。

経済的な生活苦を解決してからとか、ひまが出来てからなどと考えずにそれらに努力しつゝそれと同時に出来るだけ生活を楽しく過ごす方法を身近な手輕なことから始めるように致しましょう。

こうした意味からいつて、レクリエーションが是非必要になつてくるのであります。最近各地にレクリエーション運動がくりひろげられて来たのは本當にうれしいことですが、もつとへ普及され一人でも多くの人が理解し、實行して戴けるように、ごく分りやすく説明しこゝに小冊子を編集致しました。殊に指導者の人に讀んで戴き一般の人に廣く普及されることを望みます。

この本が皆様に親しまれ、いさゝかでも皆様の御役にたち生活の潤いを求める端緒ともなれば、非常な喜びでもあります。

「生活を楽しく過ごす」手段として、レクリエーションが必要であり、取り上げたレクリエーション活動、特にゲーム、歌、ダンス、レクリエーション・パーティーを、指導者が学び、廣く普及してくれることを望んでいるという趣旨の「はじめのことば」になっている。健全で明朗な社会をつくるための社会教育の手段として、終戦後の混沌とした時代にレクリエーションの価値は見いだされ、G・S・D（ゲーム・ソング・ダンス）の活動があたかもレクリエーションであるという考え方が、啓発されていったようである。また、GHQ 支配下にある中でも、米国のレクリエーション理論を十分に理解する余裕もなく、レクリエーションは活動種目として、手段の一つとして扱われていたことも理解できる。

『青少年団体のためのレクリエーションの手引』（神奈川県教育委員会社会教育課）のレクリエーションについての一反省

『レクリエーション手引』の発行につづき、昭和 26 年 3 月に、神奈川県教育委員会社会教育課青少年係が発行した手引書である。手引書には、「序にかえて」のまえがき後に「レクリエーションについての一反省」が 4 ページにわたって差し込まれている。当時のレク

リエーション関係者が、一部の活動だけがレクリエーションと捉えられてしまっている現状に違和感を覚えつつも、G・S・D（ゲーム・ソング・ダンス）中心の手引書を発行しなければならなかった苦悩をうかがい知ることができる。その書き出しは次のとおりである。

レクリエーションについての一反省

日本では永い事、レクリエーションはスクエヤーダンスであるという時代がありました。それから「いや、スクエヤーダンスばかりでない、フォークダンスもゲームも入るのだ」という時代となり、現在は一般的にはその域を脱していないのではないかと思います。併し、レクリエーションという事は、ゲーム、ダンス、そのものではないのです。それらは只手段にすぎないのです。ですから疲れた時寝る事も、空腹の時食事するのも、勿論、レクリエーションです。しかし、それらはすでに人間の基本的本能としてだれしものが、すでにやつてる事でありましょう。又、この人間の欲求は單に衣食住に止らず、多種多様であります。自由への欲求、変化への欲求、競争本能、協同の欲求、知る事への欲求等いろいろあり、それらも基本的欲求と同じく、欠乏すると心身共に不活潑になり、逆に適当に満足させると生活全体が活潑となるのです。

人間はかく多面的な、しかも社会的に是認された多くの欲求を正しく推進してゆく所に人間としての特殊性、価値があるのであり、新憲法に明記された幸福への追求もこうした所から生まれるのではないのでしょうか。・・・後略・・・

まとめ

『レクリエーション教本』では、レクリエーションの意義を「レクリエーションとは、本来休養、あるいは気晴らしの意味であって、娯楽という廣い概念はそこから派生して来たものであります。」と説明しつつも、G・S・D（ゲーム・ソング・ダンス）の種類を紹介した内容に終始していた。

レクリエーション指導者資格者を養成する、(公財)日本レクリエーション協会が資格制度を導入した昭和 26 年以前から、社会教育によって民主主義の思想を広めようとする GHQ の思惑も働き、集会やつどい、パーティーの演出にレクリエーションが重要だということが積極的に啓発されていたことがわかった。また、指導の幅を広げるための手段として、ゲーム・ソング・ダンスの種類を豊富化させ、身に付けておくことは、レクリエーション指導者から求められていたものと推察でき、この需要を満たすために、昭和 23 年以降にゲームや歌、ダンスの紹介本が、数多く出版されるようになったと考えられる。

神奈川県教育委員会が一反省として書き記しているように、レクリエーションとは、G・S・D（ゲーム・ソング・ダンス）のことだけではないことに気付いていた専門家は少なからずいたようである。にもかかわらず、時代が平成に入ってから指導者資格の養成カリキュラムにおいても、中心的な実技種目として取り上げられ続けていることを考えると、わが国のレクリエーション運動の特質のひとつは、G・S・D（ゲーム・ソング・ダンス）を重宝し続けてきたことにあると認められる。

文献

上田久七、1949、『レクリエーション』三省堂出版

北海道教育委員会保健体育科、1950、『レクリエーション資料』

(財)日本レクリエーション協会、1950、「第三回全国レクリエーション大会報告」